

地球を 読む



よくぞ、約3500キロを

踏破することができたと、
自分自身をほめたい気持ち
でいっぱいだ。がんを1度
でも経験したことがある
「がんサバイバー」支援を
広く訴えようと「全国縦断
がんサバイバー支援ワー
ーク」を行い、7月23日、
歩き終えることができた。
本稿では、このイベントに
ついて報告したい。
わが国では超高齢社会の



垣添 忠生

日本対がん協会
会長

がん経験者支援

到来とともに、がんは2人
に1人がなる病気であり、
毎年100万人を超す人が
新たにがんになっている。
一方で治療成績は向上し、
5年生存率はかつて40%以
下だったが、今や60%を超
えている。がんを乗り越え

または、がんとともに歩む
人が増えているのだ。
それなのに、実際にがん
と診断されると、多くの
が「なぜ自分はがんになっ
たのか」と嘆き、疎外感や
孤立感に苦しみ、治療中も
いつ再発・転移するかと恐

では、正しく信頼できるが
ん情報など、がんサバイバ
ーとその家族が必要とする
様々な情報をホームページ
から提供している。
さらに、日本対がん協会
が以前から行ってきたがん
に関する電話相談「がん相

GSCの活動は、会の趣
旨に賛同する個人・法人会
員の寄付によって成り立っ
ているので、会員数の増加
がカギとなる。個人会員は
現在250人だが、10年後
に100万人を目指してい
る。実現できれば、がんサ

バイバーや医療関係者の声
に耳を傾ける機会を作りた
いと考えた。
私は、日本のがん診療を
リードしている全国がんセ
ンター協議会に加盟する32
の病院を一筆描きのよう
に、できる限り歩いて訪問
し、サバイバー支援を訴え
ようと決意した。

「サバイバー」運動 3500キロ

怖におびえる。

がんサバイバーを孤立さ
せてはいけないと、私が会
長を務める日本対がん協会
は、本部の中に「がんサバ
イバー・クラブ」(GSC)
を設立し、2017年6月
から活動を始めた。GSC

「がんサバイバー」を孤立さ
せてはいけないと、私が会
長を務める日本対がん協会
は、本部の中に「がんサバ
イバー・クラブ」(GSC)
を設立し、2017年6月
から活動を始めた。GSC

「旅」を終えた。
18年2月5日の九州がん
センター(福岡市)訪問を
スタートとして、約半年か
けて日本列島を北上し、7
月23日、北海道がんセンタ
ー(札幌市)に無事到着し
た。地球の直径の4分の1
に相当する約3500キロの

「旅」を終えた。
18年2月5日の九州がん
センター(福岡市)訪問を
スタートとして、約半年か
けて日本列島を北上し、7
月23日、北海道がんセンタ
ー(札幌市)に無事到着し
た。地球の直径の4分の1
に相当する約3500キロの

地球を 読む

1面の続き

垣添忠生氏 1941年生
まれ。東大医学部助手などを
経て国立がんセンター病院勤
務。手術部長、院長、総長、
名誉総長を歴任。2007年
3月から現職。

私自身、大腸がん、腎が
んのサバイバーである。今
年4月で77歳になった。今
回の「全国縦断 がんサバ
イバー支援ウォーク」の計
画について昨春秋、日本対
がん協会の人たちに相談し
たところ、当初は私の体調
などを心配して、反対の声
が上があった。

しかし、私は「がんサバ
イバーを支援しよう」とい
うノボリを作るなど準備を
進めた。また、私の秘書が
綿密な旅程を立ててくれる
うちに、協会は、私の熱意
を受け止めてくれた。

私は妻をがんて亡くした
遺族でもある。その立場で
全国各地のがんサバイバー

交流会に参加すると、患者
や家族の方々は率直に悩み
を語ってくれた。

多額の治療費が重くのし
かかり、苦労されている方

がんのイメージを変えたい

がいた。一方、がん治療の
最前線に立つ医師からは、
地方で医師不足が深刻だと
の嘆きも聞かれた。

歩行中もウォークに関す
る地元の新聞やテレビの報
道を見て、または、私が手
持つノボリを見て話しか
けてくる人も多く、たくさ
んのミニ交流があった。生
んサバイバーとの交流会が
イバーを取り巻く課題を改

を余儀なくされた。
行程中、既に入っていた
予定をこなすため、ウォー
クを中断して東京に戻り、
がなりえる病気であり「が
んイコール死」という時代
ではないとして、がんとい
う病気のイメージを変えよ
うと訴えた。さらに、予防
のための禁煙と、早期発見
につながる検診の大切さも
道知事から「私たちががん

めて突き付けられた。

支援ウォークの期間中、

私はGSCへの参加と寄付

をお願いした。がんは誰も

がなりえる病気であり「が

んイコール死」という時代

ではないとして、がんとい

う病気のイメージを変えよ

うと訴えた。さらに、予防

のための禁煙と、早期発見

につながる検診の大切さも

道知事から「私たちががん

対策を進めることを約束し

たい」という熱いメッセー

ジをいただいた。

このウォークの話を知り

たフランス・リヨンの国際

予防調査研究所長のピエタ

ー・ボイル博士に「がんサ

バイバー支援は全世界的な

課題だから」と招かれ、7

月11日にウォークについて

話した。10月には米国の超

一流医療機関メイヨー・ク

リニックでも講演する。

私がフランスや米国での

講演に招かれたりするの

は、サバイバー支援の重要

性が世界的に認知されてい

ることを意味している。

加えて、私が全国を「歩

く」ということは、今日の

時期が来たか」と思った。

実際に歩いたルートが交錯

した「奥の細道」の再読が

必要か、とも考えてみた。

身体的にはつらいが、精神

的には超ぜいたくな時間に

浸っていたように思う。

季節の移ろい、景観や人

情の地域差、困難な時の支

援の手。多くの体験からこ

の国は捨てたものではない

と感じる半年だった。

わが国にがんサバイバー

支援が定着すれば、人々が

手と手をとって互いに支え

合う社会が生まれ、人々の

がんに対するイメージも変

わるだろう。生まれてきて

良かったと感じることがで

きる国となることを目指し

て努力を続けたい。

がんサバイバー・クラブ

のホームページ <https://www.gscclub.jp/>

英文はあすのジャパン・ニ

ューズに掲載する予定です